

博士論文要旨

氏名	安富 由季子
学位の種類	博士 (英文学)
学位記番号	甲第4号
学位授与年月日	平成17年3月16日
学位授与の条件	神戸女学院大学学位規程第5条1項の規定による
学位論文題目	ワーズワスの眼—『序曲』における外界認識の変遷—

論文の要旨

19世紀イギリス・ロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)の自叙伝的長編詩『序曲』(*The Prelude or Growth of a Poet's Mind*, 1805年)には、この詩人の視覚への強い関心が随所に見て取れる。例えば、ワーズワスは視覚を「人生のどの段階においても我々の五感のうちで最も独裁的な感覚」(in every stage of life / The most despotic of our senses)と位置付け、「本来調整の効かない視力」(By nature an unmanageable sight)が彼に及ぼす絶大な力について言及していることから¹⁾、「視覚」および「眼」がこの詩人にとって重要なキーワードの一つであることは明白である。そのワーズワスの視覚および眼について議論してきた評論家達は少なくない。しかしながら、『序曲』全体を通しての「眼」の変化に焦点を当てた議論はこれまで十分になされてこなかった。本論文では、『序曲』においてワーズワスが自らの成長段階それぞれを「眼」(eye)という語で示していることに注目し、その特徴的な3つの眼、すなわち“a watchful eye”、“the bodily eye”、“the intellectual eye”²⁾に光を当てることによって、詩人ワーズワスの成長の過程を考察する。

本論文では、この3つの眼の段階に、その「眼」に至る以前の五感の段階を加え、4つの成長段階を提示する。まず、第一の段階は幼年期、子ども時代に該当する。この時期のワーズワスは五感すべてを融合的に用いて外界を捉え、世界との強い一体感のうちに強烈なまでの歓喜と高次の存在からの祝福を直感的・本能的に受容している。第二の段階は、ホークスヘッド時代後半からケンブリッジ在学中及びその数年後にかけての時期で、年齢にすれば15歳から23歳前後の期間である。この時期におけるワーズワスの興味の最高位は自然が占めていたが、同時に人間に対する関心も急速に深まっていた。外界を知覚する手段においては聴覚と視覚に集中する傾向が見られ、同時に、幼年期においては過度であった喜びの度合いが徐々に静められていく。青年ワーズ

1) *Prel* XI. 17-3; VII. 709. 『序曲』の引用は *The Prelude 1799, 1805, 1850*, ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams and Stephen Gill (New York: Norton, 1979) からとし、特に断らない限り1805年版からの引用とする。以後、*Prel* と略記する。

2) *Prel* VIII. 66; *Prel* (1850) XII. 128; XII. 57.

ワズは「注意深い眼」によって高次の力の存在も感受しており、その認識ゆえに世界との一体感を感じる事が可能となっている。第三段階を象徴する「肉体の眼」はケンブリッジ時代から20代後半の時期に顕現している。この眼は時期的には「注意深い眼」と多少重なるものの、その本質においては全く異なる眼差しである。この時期のワズワスは18世紀後半に英国で流行したピクチャレスク美学の影響を受け、事物の外面的側面に拘泥するものの見方を示している。その眼差しは、見るものと見られるものを峻別し、その二者が交わることを許さない。ワズワスがこの「肉体の眼」の支配から逃れ、最終的な段階である「知性の眼」に到達したのは、「ティンターン寺院」を執筆した1798年前後であると考えられる。「知性の眼」は、主体と客体の境界線を越えて、世界との一体感を目指す点においては、第二段階の「注意深い眼」と同質であるが、ワズワスが成長の過程で天上の光を見ることが適わなくなったことから、「注意深い眼」そのものへの回帰はありえず、むしろ前進を示すものである。「思索」と「想像力」という二つの力と共に働く「知性の眼」がその視線を向けているのは、目前の現実の風景ではなく、記憶の中の心の風景であり、そこからワズワスは現在の悩みや苦しみを軽減させてくれる回復力を得る。ワズワスはまた、「知性の眼」をもってすべての事物に「万物の生命」を見ることにより、ありふれた日常の風景にこそ人間の尊厳を洞察し、魂における地上の楽園再来の可能性をも見出している。すなわち、「知性の眼」とはワズワスが詩人として拠りて立つ認識なのである。

以上のように、ワズワスは五感すべての融合的感觉を始点として、「注意深い眼」、「肉体の眼」を経て最終的に「知性の眼」にたどり着いたが、どの段階が優れ、どの段階が劣っているということではない。何故ならこれらの各段階すべてが人間として、詩人としてのワズワスの成長に不可欠な一連の過程であるからである。ワズワスは『序曲』において自らの眼差し、言い換えれば自らと外界との関係の推移を語ることによって、18世紀の視覚中心主義に示されている精神を付属的なものとする見方への警鐘をならし、人間においては肉体ではなく精神こそが主体であることを、また、その魂こそが世界の受容者であると同時に創造者でもあることを高らかに宣言しているのである。その意味においてワズワスの「知性の眼」は「事物を新しくさせる視覚的な革新」³⁾であり、喪失を糧にして成長する人間の生への全面的な肯定の表明なのである。

論文審査結果の要旨

本論文の目的は、ウィリアム・ワズワスの自伝的長編詩『序曲』（副題：「詩人の魂の成長」）を通して、ワズワスの成長過程をたどりながら、詩人としての自らのよりどころとした最終的な詩的視点を確立していった軌跡を明確にすることにある。論者は、作品の中でワズワス自身が特別の意味を含ませて用いている「眼」をキーワードとして捉え、ワズワスは「事物を新しくさせる視覚的な革新」をもたらした詩人であると結論づけている。ワズワスの作品における

3) M. H. Abrams, *Natural Supernaturalism: Tradition and Revolution in Romantic Literature* (New York: Norton, 1971) 411.

「視覚」あるいは「眼」の重要性については、すでにいくつかの考察がなされているが、『序曲』全体における検証はまだ十分になされていない。

『序曲』の中でワーズワスは自らの成長段階を特徴づける詩的眼差しとして三つの「眼」を挙げているが、論者は、視覚が視覚として意識されなかった幼少年時代を新たに加えて、詩人ワーズワスの成長過程を四つの段階に分類して吟味している。すなわち、1. 「眼」にいたる以前の感覚の時代（14歳頃まで）。2. 第一の眼である「注意深い眼」の段階（15歳前後から23歳前後まで）。3. 第二の眼である「肉体の眼」の段階（18歳頃から27歳頃まで）。4. 第三の眼である「知性の眼」の段階（28歳前後より以降）である。この四段階の区分が即本論文を構成する章分けとなっている。

第一章「“All Intercourse of Sense” —統合された身体感覚—」では、論者は、幼少年時代の外界との関わりが、動物的本能に近い身体的感覚によってなされていたことを指摘し、ワーズワスが「些細な喜び」あるいは「粗野な歓喜」といった表現で特徴づけているように、この時期は思考とは無関係に、五感すべてを働かせて外界と直接的に交わる時期、「感覚の時代」そのものであると分析している。そして、この時期は、子供の情的、直感的、即時的反応のみが顕著である一方で、同時に、大人が失いかけている感性を回復する可能性を想起させる段階でもあるとワーズワスは捉えている点を強調している。

第二章「“A Watchful Eye” —「一なる生命」の感受—」では、外界、特に自然を見つめる眼に変化が意識されるようになる青年期のワーズワスの新しい「眼」についての考察がなされている。この時期を際立たせているのは、外界との結びつきを少年時代に似て、五感によって確立しようとするなかで、特に視覚と聴覚が意識的に集中的に用いられている点である。しかし、これらの感覚は以前と違って単なる肉体的喜びを生じさせる感覚というより、日常を超えた次元を垣間見、そこに大なる力を感知することを可能にする、いわば「心の眼」へと変わっている。精神の眼、すなわち「注意深い眼」の認識がそこにある。ワーズワスの自己と外界はこの時一つとなり、「一なる命」が認知される。この一種の神秘的体験はワーズワスの眼を、自然のみならず、自然と人間の深い絆を注視する眼へと変えていく。

論者は第三章「“The Bodily Eye” —主体と客体の分離—」で「注意深い眼」に平行して意識されていた「肉体の眼」とワーズワスが呼んだ「眼」についての検証を試みている。「注意深い眼」という高次の体験を可能にする眼が開かれたときは、同時にワーズワス自身が「五感のうちでもっとも独裁的な感覚」と呼んだ視覚の影響を顕著に感じ取っていた時期でもあった。論者は、この認識は1790年代に人気が頂点に達したウィリアム・ギルピンを初めとする提唱者によって唱えられたピクチャレスク美学の影響によると論じている。1770年生まれのワーズワスは、最も感受性が豊かな時期にこの美学の洗礼を受けていたであろうことは想像に難くない。人々の関心を自然の美しさに向けさせた美の捉え方であったものの、視覚を通してのみ自然を見つめるピクチャレスクの眼は、ワーズワスにとっては極度に限定された、表面的な自然の美しさしか見ない「肉体的な眼」そのものであった。「注意深い眼」のまなざしを己のものとしていた時期のワー

ズワスは、その限界を見抜き、その支配から脱却していったのである。

第四章「“The Intellectual Eye” 一詩人の目一」では、論者はワーズワスが到達した、詩人としてのよりどころともなる「眼」についての入念な考察をしている。「肉体の眼」からの解放は心の眼で不可視の世界を見つめ、一体化する喜びを可能にする「注意深い眼」の回復をもたらした。しかしそれは単なる回復の段階にとどまるのではなく、自然とのさらなる交感を通して、その眼に新しい次元が付加された「知性の眼」が確立されていったのである。その視点の確立は、ワーズワスが認識していた自らの意識の変化に深く関わっていると論者は分析している。外界との交感から得られる喜びの度合いは、成長とともに大きく変化していく。そしてその変化は、詩人にとっては痛みを伴う喪失感となって強く意識される。しかしながら、この人間の成長過程に生じる現象を、避けられない事実として受容するとき、ワーズワスが「知性の眼」と呼んだ、成熟した詩人また人間として外界を見つめ直す眼が与えられるのである。それは、自然のみならず人間、そして不可視の世界を「注意深い眼」より遙かに高く、また深く見通す、繊細で創造的な「眼」である。「知性の眼」は思索と詩的想像力と共に機能することによって「魂の眼」となり、感覚の世界から内面の世界、さらには霊的な世界を見通し、すべての事物に働きかける大いなる力の存在を再認識させる。この「知性の眼」による詩人の魂の覚醒は、日常のなかに地上の楽園を創造する可能性を実感させるのである。

以上、本論文は「眼」という一つのイメージに集中することによって、詩人ワーズワスの詩的感性の変化と成長を明らかにし、詩人としての自らの位置を確立した過程を明確にすることに成功している。論者は本論の中核をなしている『序曲』のみならず、初期の作品も含めて、ワーズワスの主要な作品を良く読みこなしており、作品からの引用も適所に適切かつ効果的に用いられている。ただ本論では詩人の言葉による論旨の裏付けが基本的な批評姿勢として貫かれているが、前後の解説の必要性を無視して直進的に論を進めていく傾向や、論旨が真面目すぎて、論理の展開というより解説にとどまっている部分が見受けられるのが惜まれる。しかし、総体的に見れば、多くの先蹤著書や論文を援用しながらの論の構成は、探求的情熱を感じさせる論述と相まって、説得力のある好感の持てるものであり、労作と評価できる。若きワーズワス研究者として論者の今後の発展が期待される。

独創的な新しい視点に基づき論述された本論文は学位を授与するに値するものと認め、審査は合格と判定する。

2005年2月9日

主査 泥谷 征人 教授

副査 平井 雅子 教授

副査 添田 透 甲南女子大学教授